

# 「批判」の発話について

李 奇楠（北京大学）

## 要 旨

本考察は演述行為の一つとしての「批判」の発話について、その語用論条件にもとづき、認知言語学的特徴を中心に論じた。意味的にはマイナ斯的評価の語彙、否定構文および擬似的否定構文に分けて、具体的用例をとりあげながら分析した。さらに「批判」と配慮の関係を視野に入れ、そのストラテジーとして、事実の羅列や揶揄表現や他のコトガラについての「ほめ」などによる間接的批判を提出した。その上で、テキストレベルの「批判」に言及し、語やセンテンスとは異なる次元だが、その相互依存の関係を確認できた。「批判」は高度認知活動として、価値観に左右されることが大きい面があり、あくまでも話者認識の反映である性質を持つと言えるであろう。

キーワード：批判、語用論、意味、構文、発話

## 1. はじめに

それまでの追窮の積み重ねがあつてから二十世紀八十年代に端を発した語用論の分野において、発話行為に関する研究はその重要な一部分となっている。中ではイギリスの言語哲学者である Austin、アメリカの言語哲学者である Searle の理論がもっとも重んじられてきた。とくに Searle のことばと世界との関係を中心に、発話行為の五分類の理論はのちの語用論とりわけ行為や機能の立場から考える学者に継承され、発展させてきていると言えるであろう<sup>(1)</sup>。

発話行為についてのカテゴリー的機能的な研究は少なくはないが、管見のかぎり、「批判」の発話についての語用論研究はあまり見られていない。「批判教育」の重要性や「批判精神」の養成の大切さなどが叫ばれている昨今、「批判」発話そのものに関する言語学研究も急務となるのではないかと考えている。本論は日本語における「批判」の発話の意味構造や形態特徴を明らかにしようとする研究目標を立てている。

## 2. 「批判」とは

ここでは、まず「批判」の概念について確認する。

辞書には次のような説明がふつう書いてある。

ひはん【批判】(名) スル

- ① 物事の可否に検討を加え、評価・判定すること。「学説―」「―を仰ぐ」
- ② 誤っている点やよくない点を指摘し、あげつらうこと。「政府の外交方針を―する」
- ③ 〔哲〕〔ドイツ Kritik〕人間の知識や思想・行為などについて、その意味内容の成立する基礎を把握することにより、その起源・妥当性・限界などを明らかにすること。(大辞林 第三版)

ひ-はん【批判】(名) スル

- 1 物事に検討を加えて、判定・評価すること。「事の適否を一する」「一力を養う」

- 2 人の言動・仕事などの誤りや欠点を指摘し、正すべきであるとして論じること。「周囲の一を受ける」「政府を一する」
- 3 哲学で、認識・学説の基盤を原理的に研究し、その成立する条件などを明らかにすること。(デジタル大辞泉)

上記の引用からも分かるように、「批判」の意味には哲学用語としての解釈以外には、いわゆる中立的「評価・判定」の意味と誤りや欠点を指摘する意味がある。このうち、物事の可否に言及する広義の意味を客観的判断・判定と見られるのが一般的であるため、今回の考察はその誤りや欠点を指摘する狭義の「批判」を中心に行う。

ちなみに、英語の言明用法の発話行為(命名)動詞については、Vanderveken(1990)の邦訳である久保進監訳のヴァンダーヴェーケン(1997)には次のような論述がある。

“criticize”は、二つの別々の言明用法の発話行為(命名)動詞用法を持っている。ひとつは価値判断を含意するものであり、もうひとつはそうではないものである。前者の用法においては、“criticize(批評する)”という動詞が命名する発話行為は、重要であると判断される特徴を見つけようという試みにおいて、当該の話題に関して一連の言明を単に行うことである。(このような使用の代表は文芸批評であるが、普通の話し言葉でも用いられる)。この意義はその動詞の語源に近い。ギリシャ語では、κρίνεινは“判断する(judge)”ということの意味する。もう一方の用法においては、“criticize(けなす)”という動詞が命名する発話行為は、誰かについて、もしくはその人の欠点を強調する何かについて言明を行うことである。従って、表された事態の有様が悪いことであるという主旨の命題内容条件と、その話し手がその事態の有様を是認(approve)しないという主旨の誠実条件が存在する<sup>(2)</sup>。その一方で、誰か、または何かを“praise(誉める)”という発話行為は、その人またはその事柄に関する事態の有様が良いということ“assert(言明する)”と同時にその事態の有様の是認を表現することである。この場合、前者は命題内容条件、そして後者は誠実条件である。従って、“praise(誉める)”は、2番目の意義での“criticize(けなす)”と最小対を成す。(ヴァンダーヴェーケン(1997:182))

“criticize”の2番目の意義は上の論述では「けなす」と訳されているが、その下線を引いている部分に示されているように、「表された事態の有様が悪いことであるという主旨の命題内容条件と、その話し手がその事態の有様を是認(approve)しないという主旨の誠実条件が存在する」から、カテゴリーとしての「批判」の発話行為(命名)動詞と理解してよいであろう。以下では、このカテゴリーである「批判」の発話行為に関して、語用論的検討を進めたいと思う。

### 3. 「批判」の語用論条件

「批判」の発話が成立できるには、発話者いわゆる批判側、批判される側いわゆる批判を受ける対象、批判の中味いわゆる批判の発話そのものの存在などがなければならない。何を以って批判しているのかいわゆる批判という判断の基準などもかわるが、いつ、どこでなども含めてすべて批判の発話行為の語用論条件となる。

人間平等の観点から、批判者つまり批判という発話行為の動作主体は本来、上司部下や

年上年下などのないいわゆる上下関係に束縛されなく、どなたもなる可能性がある。ただ、面と向かって批判する場合の発話は現実的にはそうならない場合もあるであろう。面子への、あるいは思いやりのある配慮のことが絡んでくる。この点に関しては性格などの個人差も大きいですが、5で考えることにする。

批判の対象に関しては、批判の発話との関連が密である。批判される側は特定の一人だけではなく、複数の人々やその人々が所属する集団・グループ・組織なども含まれる。批判を直接受ける対象はその人あるいはその人々や組織などによる行為、その対象に属するものやことなど、全般のコトガラに及ぶ可能性がある。ただ、単数や複数、ものやことを問わず、批判の行為には対人性の性質が備わるのは言えるであろう。

- (1) 私たちは当時、〈現代芸術の会〉というグループを作って、薄っぺらなパンフレットなどを発行していた。今にして思えば、私たちは、やはり一種の異端分子だったらしい。

〈凍河〉という露文科のクラス雑誌に、私は奇妙な〈毛沢東の文芸講話〉批判を書いている<sup>(2)</sup>。私の立場は、基本的には今も変わらないが、その文章に、ユーグ・パナシェの〈リアルジャズ〉の一部を引いているあたりが苦笑ものである。  
〔『風に吹かれて』〕

- (2) モスクワ大学に入学するためには、勿論勉強が出来なくてはならない。競争率も激しいらしく、ソ連の高官や有名人達は子弟をモスクワ大学に入学させるために、一生懸命であるらしい。洋の東西を問わず裏口入学などの噂もある、フルシチョフが、地位を利用した入学運動を批判した<sup>(3)</sup> 事があるそうだ。〔『風に吹かれて』〕
- (3) 従来 of 哲学・言語学 of 分析対象の多くが、事実を述べた叙文的な文であったのに対し、オースティンは言語が依頼や警告などの機能を果たす側面に注目し、発話の力や遂行分析などの概念を提唱した。また、現実の使用を離れて語の意味を記述しようとする傾向を、議論を袋小路に陥れるものとして批判した。彼の議論はサールらによって継承され、語用論・発話行為の理論の基礎を形成した。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%83%BBL%E3%83%BB%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%B3>。2016年01月16日に参照)

(1) (2) (3) から分かるように、批判の対象はさまざまである。人・こと・本の内容や研究の内容などなど、本当に世の中の存在や現象などすべてを網羅するようである。さらに、対人的な性質だけではなく、内的・自己批判もあるので、話し手自身より話し手自身への「自己批判」もある。まったく異質的なものが含まれていると言わざるをえない。

だが、批判される側の多様性にもかかわらず、上記2のヴァンダーヴェーケン(1997:181)部分の引用にも書いてあるように、「表された事態の有様が悪いことであるという主旨の命題内容条件と、その話し手がその事態の有様を是認 (approve) しないという主旨の誠実条件が存在する」と言える。この命題内容条件と誠実条件は批判の発話におけるぶれない語用論条件であるに違いない。

「批判」の基準については、何が悪いのか、何を是認しないのか、その発話者の価値観に左右される部分がかなり大きい。一般論的な主観的部分が否めないところがある。

- (4) 口ではつけつけ言っているが、別に辛辣という調子ではない。と言って、特別にその言葉から愛情も感じられない。程々に突き放し、まあ正当に梶大助を批判しているといったところである。この夫人の前では、梶大助の実業家としての豪さも、特別な意味は持たないであろうと、曾根は思った。その重厚さは「むっつりや」と解釈され、思慮の深い点は「変に考え込む人」ぐらいに片づけられそうである。  
(『あした来る人』)

(4) のように、同じ人物の同じ特徴に関しては、まったく正反対の評価が下される場合もある。一方はプラスの評価、他方はマイナス評価いわゆる批判になっている。どちらの評価を取るのか、所詮判断を下す主体の認識によるであろう。真実は一つしかないかもしれないが、その真実に関する見方が放射線的に分かれる可能性も十分ある。俗的に言っている「他人の目を気にしない」や「自分の道を歩こう」などのような言い方はそれなりの道理があると認められるであろう。

「批判」の発話にとって、言語行為として遂行される場合、他の行為と同じように、いわゆる発話行為者、発話を受ける側、発話そのものすなわち「批判」の具体的表現、時間や場所などの要素が含まれるが、具体的発話以外もっとも大事な弁別的特徴はおそらく上記の命題内容条件と誠実条件であろう。「表された事態の有様が悪いことであるという主旨の命題内容条件と、その話し手がその事態の有様を是認 (approve) しないという主旨の誠実条件」は統一的側面があると言える。誠実条件は批判者の態度ないし価値観のようなものであり、それは命題内容のほうに反映されている。言い換えれば、具体的発話のような形で現れる。以下この「批判」の発話そのものに注目して論じる。

#### 4. 「批判」の認知言語的特徴

いかなる発話は形態的特徴として、語彙、構文のようなスタイルで構成されている。「批判」の発話もその例外ではない。ここでは、まず言語的ユニットいわゆる語やセンテンスのような単位に焦点を当てて考察する。

##### 4. 1. 「批判」の発話における語彙的特徴

「批判」の発話が成立するにはその発話全体が機能することは言うまでもないが、語彙的特徴として目立つところをとりたてて言うならいわゆるマイナスの意味の語彙が使われる部分であろう。

- (5) 明治天皇に殉死した乃木大将が、その遺書において日露戦争後の道徳的混乱を激しく非難したのは、こうした矛盾を反映している。また、夏目漱石が、日本の近代化は外からの圧力に対抗するために急激に行なわれたので、日本人の良心や誠実さが失われ、虚偽に満ちた浅薄な社会が生まれたと批判したのも同じ理由によるものであった。(『激動の百年史』)
- (6) この二つの事件はニューヨーク、ロンドンといった国際市場での出来事だっただけに、国際的に大きな反響があった。事件をおこした当人はもちろんのこと、彼らが長年にわたって不正取引をしていたのを見逃した会社への批判が高まった。日本の会社の、社員の監視体制がおかしいというのである。(『日本経済の飛躍

的な発展』)

(7) その一つは、本州四国連絡橋公団の建設であり、二つは「全国新幹線鉄道整備法」の成立、三つは「自動車重量税法」の発足である。この“自動車新税”の創設を世に問うたころ、私にたいする評価は「自動車から税金をとって鉄道建設に回すという田中は気ちがい」というほどきびしいものであった。ところが最近では、私の考え方がだいぶ理解されてきたとみえて、反論や批判をあまり聞かない。(『日本列島改造論』)

(8) ところが、最近では世界各国のあいだに「日本経済の急成長は国際経済レースのスピード違反だ」という批判が高まってきた。またアメリカやヨーロッパの一部では、日本商品の急増にたいして輸入制限の動きが表面化してきている。私が心配するのは、世界貿易が拡大均衡でなく、縮小均衡の道をたどることである。(『日本列島改造論』)

(5) から (8) までの用例には、「浅薄」や「虚偽」や「おかしい」や「気ちがい」のようなマイナスの意味を表す形容詞や名詞などが用いられ、「スピード違反」のような「～～違反」の接尾辞的派生語用法や「失われ」のような動詞の受身的用法などいずれもよくないイメージにつながることば遣いが使用され、それらを通して、発話者のストレートな批判をなしている。語用論的に解釈すると直接発話行為の実施になるのであろう。

#### 4. 2. 「批判」の発話における構文的特徴

文のレベルから考察すると、「批判」の発話にはいくつかの構文スタイルを持っている。たとえば、否定構文、疑問文、べき構文、のみ構文、すぎる(ぬ)構文などの使用である。この幾タイプの構文では、否定構文は「批判」発話の誠実条件と直結している構文であり、その他は擬似否定構文のようなカテゴリーに入るであろう。疑問文はたいてい実質的疑問ではなく、疑問がないのに疑問を投げている間接否定構文であり、現状との差異を彷彿させ、反省させるべき構文はある意味で、現実批判の擬似否定構文と言えるであろう。のみ構文やすぎる(ぬ)構文は事態のありさまが物足りないことであると「批判」の行為を多少婉曲的に実施しているパターンであろう。

##### 4. 2. 1. 「批判」の発話における否定構文

「批判」行為の命題内容条件および誠実条件は「表された事態の有様が悪いことである」、「話し手がその事態の有様を是認 (approve) しない」となっているので、その「非」を指摘するため、本来であるべきだと思われる内容についての否定を表す否定構文がよく用いられる。

(9) 消費税増税法案の採決で反対し、撤回を要求していた民主党・小沢元代表ら 50 人が 2 日、離党届を民主党に提出した。小沢氏はその後、会見を開き、「もはや野田首相の下での民主党は、政権交代を成し遂げた民主党ではない」と野田政権の姿勢を厳しく批判した。

(<http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/nnn?a=20120702-00000062-nnn-pol>。2012 年 07 月 02 日に参照)

(9) には批判の発話として使われているのは「もはや野田首相の下での民主党は、政権交

代を成し遂げた民主党ではない」である。「もはや～～は～～ではない」のような名詞述語文の否定構文が使われている。発話者小沢氏の「野田首相の下での民主党は、政権交代を成し遂げた民主党」であることに関する是認しない態度が示されている。

(10) もし日本が戦争後の苦しい状況において、やむなくとった政策をいつまでもとりつづけるならば、日本はもうけすぎて少しも国際関係について協力しないと批判されるかもしれない。（『激動の百年史』）

(9) とは違い、(10) は動詞述語文の否定構文「～～協力しない」が用いられている。

(11) 日本の企業間の競争は欧米以上に激しく、「過当競争」つまり競争のやり過ぎといわれている。その日本で共同研究が成功したのは通産省の指導力によるものであることは否定できない。アメリカが日本経済を批判する材料の一つとして、こうした日本政府の介入を取り上げ、日本産業の競争力は政府の保護によるもので、本当の自由競争が行われていないと批判している。（『日本経済の飛躍的な発展』）

(11) では「日本産業の競争力は政府の保護によるもので、本当の自由競争が行われていない」という表現が「批判」の発話となっている。話題の「日本産業の競争力」についての叙述が二つの部分に分かれ、まず肯定の前半部分である「政府の保護によるもので」があり、後半の部分は「本当の自由競争が行われていない」という動詞述語文の否定形式が使われている。この並列的叙述成分は肯定にしても否定にしても文の形態的特徴の表れだけであり、意味的にはその話題の「日本産業の競争力」についての否定的評価となっている。次の(12)も同じことが言える。

(12) もっとも、中山氏は別のところでは、小林の作品は「概念的」、「具体的イメージをもっていない」とって批判しているのだから、……（『近代作家入門』）

(12) では「概念的」と「具体的」との正反対の対概念をとりあげ、一方が悪し、他方が良しとされ、ここでマイナスの意味として捉えられる「概念的」がそのまま述べられ、プラスの意味の「具体的イメージをもつ」ものは否定構文を用いることになっている。意味的に考えれば、肯定にせよ否定にせよ、単なる構文スタイルの表象のみであり、どちらも批判者の否定的認識を表している。

#### 4. 2. 2. 「批判」の発話における擬似否定構文

以下の用例を意味的に考察すれば分かるように、単純に問いを提出するのではなく、疑問がないのに質問しているタイプの語用論的疑問文である。その言外の意味は問われる内容に関する否定的見解であると判断できる。

(13) せっかく学生という身分なのに、どうして社会人の真似事のようなことをするのかという批判もあったが、この「涉外」と呼ばれる活動は、ボクにとって大きな魅力があった。（『五体不満足』）

(13) の中にある疑問文はその命題内容についての否定であり、つまり「学生の身分で社会人の真似事のようなことをする」ものではないという否定構文の変体的表現である。

(14) あるいは、「インドなど援助してやっても、少しも感謝しない。そんな国には援助する必要などないじゃないか」という批判である。（『適応の条件』）

(14) の否定疑問文の使用は「そんな国には援助する必要などない」の意味を強調するこ

ととなっていて、結局否定構文の批判の発話であると首肯するであろう。ちなみに、4.1の(7)にある「「自動車から税金をとって鉄道建設に回すという田中は気ちがいか」のような厳しい批判の発話にも疑問構文のスタイルをとっているが、「～～田中は気ちがいか」のような疑問文より、実際は強い肯定文「気ちがいだ!」の変体となっていて、意味的には否定的評価であるに違いない。

(15) タレントのベッキー(31)と4人組バンド「ゲスの極み乙女。」のボーカル川谷絵音(えのん=27)の不倫交際報道を受け、タレントの優木まおみ(35)が「軽率過ぎる」とベッキーの行為を批判した。

(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20160107-00000127-nksports-ent>。2016年01月に07日に参照)

(16) 戦後の農業政策にたいし、一部から「農業を手厚く保護しすぎる」との批判もあった。(日本列島改造論)

一方、(15)(16)のような「～～すぎる」構文は度を越す行為への批判として、その問題点の直接指摘である否定的判断の発話として使われている。

(17) 当時(明治三五年四月二八日)の日記に、「余は遂に詩人だ、そして詩人のみが真の教育者である。(略) 文部省の規定した教授細目は『教育の仮面』にすぎぬ」と批判し「鬱勃」(うつぼつ)たる革命的精神のまだ混沌として青年の胸に渦巻いているものを小説に描きたいと書いている。(近代作家入門)

(17)の「～～にすぎぬ」構文は正真正銘の否定構文でもあり、一見(15)(16)のような「～～すぎる」構文の反対語的表現となっているが、その命題内容についての蔑視的評価が強調されることになっている。

さらに、「非」を排斥し、その「非」の反対側いわゆる「是」を主張するような批判もある。ある意味でストレートな批判の発話でもあるが、べき構文の使用である。

(18) アメリカ大統領選挙の共和党指名争いでトップを走るドナルド・トランプ氏は、民主党候補のクリントン氏らに対し、過激派組織「イスラム国」を作り出した責任があると非難しました。共和党、ドナルド・トランプ氏:「クリントン氏がオバマ大統領とともに『イスラム国』を作り出した」さらに、クリントン氏が公務で国務長官在任中に私的なメールアドレスを使っていたことについて「刑務所に入るべきだ」と批判しました。また、オバマ大統領が年頭演説で銃規制強化の意向を表明したことについて、自衛のための武器保有の権利を定めたアメリカ合衆国憲法修正第2条に対する脅迫だと非難しました。

(<http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/ann?a=20160104-000000003-ann-int>)

(19) いま日本では官僚に対する批判が高まっている。とくに日本に数ある官庁の中で、もっとも大きな権力を持っている大蔵省に対する攻撃が激しく、「大蔵省を解体すべし」という過激な主張も出てきた。日本の官僚制はこれからどうなっていくのだろうか。(『日本経済の飛躍的な発展』)

(18)の「刑務所に入るべきだ」も(19)の「大蔵省を解体すべし」もべき構文の応用例である。意味的には現状に対する反動であり、前者の(18)は「刑務所に入って」いない、普通の自由な生活をしている現状に終止符を打つべきだということの主張であり、後者の(19)は発話時に現存的状態の「大蔵省」そのものの存在が意味がないとの訴えでもある。

どれも容赦ない批判の発話だと言えるであろう。

語彙にせよ構文にせよ意味論的検討が「批判」発話を捉える上でもっとも有効的手段だと考えられる。意味は概念化のようなダイナミックのプロセスだが、語やセンテンスなどの言語的要素に還元するため、語彙・構文・意味のような三位一体の総合的立体的考察が不可欠と主張したい。

## 5. 「批判」と配慮

「批判」の発話は「事態の有様が悪いことである」「話し手がその事態の有様を是認 (approve) しない」という語用論条件を有するので、マイナス的語彙や否定構文のような言語形式が使われるのがふつうであるが、そのストレートな「批判」を避けられるための配慮的用法も見られる。その主なストラテジーとしては、次のような手段が講じられている。一つは事実だけの羅列に止まることであり、二つ目は他を誉めることを通して代わりに批判の目的を果たすことであり、三つ目は揶揄のようなユーモラスな機能の発話を使用することである。

(20) 一方、世界のエネルギーの主流を占める石油、石炭は、炭酸ガス (CO<sub>2</sub>) などを大量に空気中にまきちらし、地球の温暖化を促進しているという批判を受けている。1992年6月にブラジルで開かれた地球サミット (国連環境開発会議) でCO<sub>2</sub>排出規制問題が取り上げられ、21世紀に向けてCO<sub>2</sub>削減に取り組むことになった。(『日本経済の飛躍的な発展』)

(21) シナの学問の文科尊重の弊は十九世紀にはいつて技術文化を背景とする西洋との対決の際に無残にも露呈され、二十世紀になると科挙の制はついに廃止されてしまうのだが、そうした成行きを予感させる批判が、次の言葉にはもうすでに含まれている。リッチはいう、「ここでまた注意すべきことは、これらの試験の委員長、試験官、監督は、文科の試験に限らず、数学、医学、武芸についても文科挙で位を得た官吏がなるということ、数学者、医者、軍人などは全然関係しない。これは西洋人にはいかにも新奇な印象を与える。この王国で文官が有する信用は大したもの、文官は自分の専門でない事柄についても正しい判断が下せると思っているらしい。」(『マッテオ・リッチ伝』)

(22) フランス人の試験礼讃の声としては、自国の現状への批判の意味が無論こめられているのだが、ヴォルテールに次のような言葉がある。「人間の精神はこのシナの統治機構以上に秀れた統治機構を案出することはできないだろう。シナでは万事が複数の大裁判所によって処理されるのだが、各裁判所の間上下機構はきちんと整備されている。そしてその各裁判所の構成員には何回にもわたって行なわれる厳格な試験に合格した者だけが採用される。」(『マッテオ・リッチ伝』)

(20) では、「世界のエネルギーの主流を占める石油、石炭は、炭酸ガス (CO<sub>2</sub>) などを大量に空気中にまきちらし、地球の温暖化を促進している」は事実をそのまま述べているが、「地球の温暖化」が人間の生活環境に破壊的なものなので、このような結果的にマイナス的事実の指摘を通して批判の機能を果たしていると言えるであろう。(21) では、「こ

これらの試験の委員長、試験官、監督は、文科の試験に限らず、数学、医学、武芸についても文科筆で位を得た官吏がなるということで、数学者、医者、軍人などは全然関係しない」は事実の叙述であり、「この王国で文官が有する信用は大したもの、文官は自分の専門でない事柄についても正しい判断が下せると思っているらしい」の部分は話し手のその事実についての感想のような内容であり、「事実+感想」は文字どおり、客観的に述べているようだが、「文官は自分の専門でない事柄について正しい判断が下せるわけがないであろう」という言外の意味を聞き手に推測してもらい、間接的「批判」となっている。文末の「らしい」は根拠がある判断であることを表すモダリティ辞だが、ただそれは間違っている判断であるので、「らしい」構文の使用は一種の配慮的批判だと言わざるを得なく、じっさい反動的・否定的意見を主張していることが分かるだろう。(22) はかなり文脈に頼る内容となっている。いわゆる他の国の試験制度の賞賛であるが、それは賞賛者のフランス人ヴォルテールによる自国であるフランスへの間接的批判となっているのである。礼讃を通して批判する典型例であろう。配慮的批判の最高レベルに達するストラテジーでもあろう。

(23) 漱石は、代助と対照的な人物として代助の父親を描き、代助の視点から批判させている。父親は、御維新を生きぬき、明治政府の役人となり実業界に入って財産を貯めた。旧い道義本位の教育を受けて育ち、それを少しも疑わぬ老人であった。旧藩主に書いてもらった「誠者（まことは）天之道也」という額を身近に飾って、「誠実と熱心」さえあれば何でもできると述べ、国家や人のために役立つ人間になれと代助に教える。そうした父を、「代助はえらいと思うより、不愉快な人間だと思ふ。そうでなければ嘔吐きだと思ふ。」そして、「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」と醒めた眼で揶揄する。（『近代作家入門』）

(23) では、「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」という揶揄を用いて、息子の視点から父親のことを批判している。その前には「不愉快な人間だと思ふ」「嘔吐きだと思ふ」のようなマイナス評価のことばを使って、父親のことを直接批判しているのと対照的になっている。

「批判」は命題内容条件にも誠実条件にも「悪い」「認めない」のような意味的内容が含まれているので、批判される側の面子を脅かすことが必至であることは言うまでもない。直接批判すると人間関係に響くことになるのも当然であろう。「批判」の目的を達したいが、相互の関係をなるべく良好に保ちたいという願望は批判者としてふつう大人として持っているはずである。そのために、上記のような事実の羅列（よくない事実で、悪い結果を招いたあるいは招く恐れがあることを相手に理解してもらえる内容）や「他のことを誉め、それと対立しているあるいは違う状況を代わりに批判する」手段や「揶揄」のような機智的ユーモラス的発話を通して批判するなどのストラテジーが生じたのであろう。

## 6. テキストレベルの「批判」について

語や文のようなレベルとは違って、テキストごとの「批判」もある。つまり、作品ごと「批判」行為を為すものである。語彙・構文とは異なる次元であるが、そのようなテキストを構成する要素としては個々の語やセンテンスの使用にもかかわるので、作品全体の「批

判」の力に加わっていることは考えられるであろう。

(24) 「侏儒の言葉」(大12)「河童」(昭2)などの風刺や諧謔を武器にした、鋭い社会批判に、最もよくその特徴がみられる。(『近代作家入門』)

(24) に書いてあるように、『侏儒の言葉』や『河童』の作品は「風刺」や「諧謔」の表現スタイルを通してテキストごとの「批判」機能を果たしている。作品そのものは社会を鋭く批判する産物であり、その有機的構成成分は作品の中に使われている語や文単位のものである。

(25) 「危険思想(今の科学的社会主義)とは、常識を実行に移そうとする思想である。」「道徳は常に古着である。」「軍人は小児に近いものである。(略)殊に小児と似てゐるのは喇叭(らっぱ)や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦ふかも問はず、欣然と敵に当ることである」(いずれも「侏儒の言葉」)などの箴言は、思想弾圧、官制道徳のおしつけ、軍国主義思想の鼓吹が政府の手で大々的に行われていた時期の発言であることを考えると、勇氣ある批判であることがわかるであろう。(『近代作家入門』)

(25) から分かるように、『侏儒の言葉』の中に書いてある「危険思想」「道徳」「軍人」などの概念についての解釈はどれも現実社会の弊害についての「勇氣ある批判」となっている。『河童』も「社会問題を多面的にとらえ、本質に迫る批判を展開したことで、芥川の最後の思想的到達点を示した」と『近代作家入門』で高く評価されている。筆者の調べによると、「批判」の語を一個さえ使っていない当該作品は、これほど評価されるのは、テキストレベルの「批判」の最高峰だと言えるかもしれない<sup>(4)</sup>。

## 7. おわりに

「批判」は高度な認知活動であり、何にもとづいて批判しているのか、なぜ批判するのか、どうして批判できるのか、本来はそのような根本的な認識論的真理追求的な議論をしなければならないが、それは真実とは何か、“真・善・美”や“偽・悪・醜”とは何かのような哲学的奥深い議論になるであろう。いずれ人類が存在する限り、この終わりなき議論が続くだろう。ここでは言語学的考察、語用論的研究を中心に分析している。

「批判」という発話行為のカテゴリーはシステムの、閉鎖的であるが、その行為を遂行するための言語表現は開放的で、無限な可能性を有すると言えるであろう。これは「批判」の発話だけに止まらず、すべての人間の発話行為を考察するとき、そのような性質を備えるのではないかと考えられる。この意味で、発話行為と発話の言語学的形態特徴の具現化との関係における普遍性をも物語っているであろう。

(26) 速射砲さながらに喋りまくり、時おり弾倉を交換するかのごとく首を「くっ」と捻るたけしの姿は、個性派揃いの漫才師の中でも異彩を放った。その毒舌が織りなすネタの主題となったのは、ジジイ・ババア・ブス・カップ(田舎者)で、さらにウンコとヤクザとガキが頻繁に登場した。また、金属バット殺人事件や深川通り魔殺人事件といった時事性の高い話題をいち早くギャグに取り入れた。これらの不謹慎ネタは「残酷ギャグ」等と批判を受けることもあったが、たけしは「たかが漫才師の言う事に腹を立てるバカ」と言つてのけた。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%BC%E3%83%88%E3%81%9F%E3%81%91%E3%81%97>。2016年01月05日に参照)

(27) 補正予算案にある所得の少ない高齢者に3万円を支給する給付金について、「選挙対策のバラマキだ」と民主党が批判したのに対し、安倍総理は、アベノミクスの恩恵が行き渡りにくい高齢者に還元するためだと反論しました。

(<http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/ann?a=20160108-00000032-ann-pol>。2016年01月08日に参照)

(26) (27) のような例が示されるように、批判を受けた場合、どのように応じるか、批判に対する批判も興味深いテーマだと思う。それについての考察は今後の課題とする。

## 注

(1) たとえば、Leech (1983)、Levinson (1983)、山梨 (1986)、小泉 (1990)、Vanderveken (1990)、山岡 (2000、2008)、山岡・牧原・小野 (2010) などのような研究成果がある。

(2) 下線は筆者によるものである。

(3) 同 (2)。以下同様。用例の下線に関しては、いずれも筆者によるものなので、以下一々断らないことにする。

(4) 『侏儒の言葉』には「批判」が一個使われているが、それはむしろ語られる関連の内容の批判力に埋没されている。その関連の内容を以下引用する。

「理想的兵卒は<sup>いやし</sup>苟くも上官の命令には絶対に服従しなければならぬ。絶対に服従することは絶対に批判を加えぬことである。即ち理想的兵卒はまず理性を失わなければならぬ。」

## 参考文献

- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫  
小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房  
小池生夫編集主幹 (2003) 『応用言語学事典』研究社  
小泉保 (1990) 『日本語語用論』三省堂  
山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版  
—— (2008) 『発話機能論』くろしお出版  
山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』明治書院  
山梨正明 (1986) 『発話行為』大修館書店  
徐昌华、李奇楠 (2001) 《现代日语间接言语行为详解》北京大学出版社  
李奇楠 (2004) 「依頼に対する応答の諸相」『研究誌 ことば』現代日本語研究会 25号, 38-49  
—— (2011) 「禁止表現の日中対照」『日本語コミュニケーション研究論集』第1号 103-112  
—— (2012) 「励ましの日中対照研究」『日本語コミュニケーション研究論集』第2号 79-89  
—— (2015) 「「訴え」発話機能について」『日本語コミュニケーション研究論集』第4号 11-21  
Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*: Oxford University Press, Oxford.  
Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford. (邦訳: 山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』研究社)  
Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, London: Longman.  
Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press.  
Searle, J.R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech act*, Cambridge University Press, Cambridge.

Vanderveken, D. (1990) *Meaning and Speech Acts*, Cambridge University Press. (邦訳：久保進監訳 (1997) 『意味と発話行為』ひつじ書房)

(李奇楠、北京大学外国語学院副教授、liqinan@pku.edu.cn)